



タイトル 日本の朝鮮統治を検証する
1910-1945
JAPAN IN KOREA
原題 Japan's Fair and Moderate Colonial Policy
(1910-1945) and Its Legacy on South Korea's
Developmental Miracle
著者 George Akita & Brandon Palmer
訳者 塩谷 紘 (しおや こう)
出版社 草思社
発売日 2013年8月28日
ページ数 310頁

韓国社会には民族主義史観が広く浸透しており、1910年から45年までの日本統治下で朝鮮人民は限りなく虐待され搾取されたという。現在も日韓関係は朴槿恵大統領の対日強硬姿勢のため深刻さが増し、首脳会談も開けない状況だ。

日本の朝鮮統治史研究においては、今まで統治下の朝鮮の人々の否定的な体験に焦点をしばった民族史観的パラダイムが大勢を占めてきた。だが、こうした体験談のみで朝鮮統治の全てを語れるのだろうか。

アメリカの二人の研究者が、あくまでも史実に基づき、可能な限り客観的にこれを検証している。著者は、本来の意味での修正主義史観による最新の研究成果を紹介しつつ、日本の統治政策が「当時としては驚くほど現実的、穏健かつ公平で、日朝双方の手を携えた発展を意図した」ものであり、朝鮮の近代化に貢献し、戦後韓国の奇跡的な発展に繋がったことを明らかにしていく。

本書は、ナショナリズムに偏した一面的な歴史認識に180度の修正を迫る第一級の研究書である。

何が書かれているか、目次を見てみよう。

I 統治史研究の最前線

- 1章 修正主義史観と民主主義史観
- 2章 日本の統治に対する民族史観的な非難
- 3章 徴兵制度に見る朝鮮統治の特性

II 統治の実相

- 4章 朝鮮統治の主役たち
- 5章 日本統治下の朝鮮の暮らし
- 6章 日本の台湾統治
- 7章 日本統治下のフィリピン

III 統治と司法

- 8章 同化政策と明治憲法
- 9章 大津事件と日本の朝鮮政策
- 10章 開かれた多元社会としての日本
- 11章 日本と法の支配
- 12章 1930年代の日本における司法の独立と朝鮮統治政策

IV 日本の統治と近代化

- 13章 明治日本は開かれた近代社会だった
- 14章 中国における近代化の現状
- 15章 欧米と日本の植民地政策を比較する

V 軍人と文官

- 16章 朝鮮政策における“軍の指導性”神話

VI 統治政策の評価

- 17章 修正主義陣営の多様な声
- 18章 「九分どおり公平（フェア）だった」朝鮮統治

我々が子供時代から教えられてきた朝鮮統治に関しては、いわゆる民族史的視点から、日本統治時代を朝鮮にとって全く無益な、史上最悪の「闇黒時代」だったとするものであったが、このような見方に疑義を唱える二人のアメリカ人歴史学者が、日韓の豊富な資料を駆使して、若い世代の歴史学者にとっては今や常套手段となった観のある「極端な主張」や「感情に訴える議論」を避け、日本統治の実態を十余年にわたって包括的に検証している。

著者は本書は、「日本統治下における植民地朝鮮の体験」という、北東アジアの近代政治史の中では「イデオロギー」と「感情」の両面で最も物議を醸すテーマを検証したもののだが、ここで二人が示す清々しいまでの率直さ、健全な判断力、そしてどこまでも客観的な証拠に依拠して展開する議論は、注目に値する。

著者は、まず読者諸氏と共有したいこととして、イスラエルの代表的作家で評論家のアモス・オズ氏とポール・グリーンバーグ記者の貴重な提言を挙げている。

まず、アモス・オズ氏は次のような警告を発している。

「国によって違いはある。まずまずの国もあれば、酷い国もあるし、やりきれないほどひどい国もある。そして、ものを話し、書く人間たちの専門領域は、ものごとを敏感に捉え、正確に表現することであり、少なくともそうした努力はつねに払われて然るべきであり、物事の正邪を識別するのは我々の仕事である。邪悪には様々な段階が存在することを無視するものは全て、思いが言葉になり、言葉が明証に昇華した瞬間に・・・邪悪の忠実な僕になり下がってしまう。だからこそ、我々は表現の正確性を厳密に迫及し、物事のニュアンスの微妙な差異を敏感に嗅ぎ取り、精妙さを的確に察知する責任を負っているのだ。よって、邪悪の実態を調べ、等級づけを行い、その程度を判断する責任が生じるのだ。単純化への誘惑に屈してはならない。我々は悪いものと、それより悪いものとの違いばかりか、それよりさらに悪い、つまり最悪のものとの違いをつねに見定めて生きていかなければならないのである。

さて、次はポール・グリーンバーグ記者が言葉の持つニュアンスの微妙な差異を精密に識別することの重要性を説く秀逸な記事を書いており、実に正鵠を射た文章なので紹介しよう。

「嘘をつくということは、意図的に偽りをかたることである。つまり、あることが真実でないことを、あらかじめ認識しつつ、なおかつ、あえてそれを伝達することによって相手を欺こうとすることである。

あることを真実だと心から信じ、結果的に誤ったことを相手に告げることを、嘘とはいわない。・・・同じように、果たせなかった約束も嘘ではない。・・・もしある政治家が減税すると言っておいて、結果的にそうしなかったとしたら、それは嘘をついたのではなくて、約束を反故にしたということだ。・・・嘘と過ちの間には、れっきとした相違点がある。

言語に備わった機能の一つは、言葉の持つニュアンスを精密に識別することであって、混同させることではない。・・・言語というものは、自由と同様、永遠の警戒心の下に守られなければならない。言葉は、いわば、思考が通貨に形を変えたようなものだ。その通貨の価値が低下すれば、当然のことながら、我々の思考も、感情も、行動も、その価値は低下するものである。

著者らは、この研究を通して、オズ氏とグリーンバーグ記者の金言を座右の銘とすべく努力したと述べているが、この箇所は日本のメディアにぜひ読んで欲しいところである。

著者は、日本は朝鮮人民の国民的威信を傷つけた、深甚な苦痛、屈辱感、怒りを味わせたことは否めないなどと随所で植民地支配の問題点を指摘している。

その上で、当時各地に存在した植民地と比較すると驚くほど穏健だったという。欧米の植民地では、強制労働、経済的搾取、村々の焼き打ち、住民の強制移動などが常態化していたという。しかし、日本は強制労働に頼らず、民衆を強制収容所に収監していない。鉄道網、電話通信網、学校、図書館、デパート、工場などの設置を通して、朝鮮半島に近代技術と技術革新をもたらした。また、朝鮮人民の健康、教育、福祉の改善に取り組み、朝鮮の人々の安寧のために懸命に努力したことも事実である。

本書は決して朝鮮統治礼賛の書ではない。あまりに一方的な歴史の見方に対する事実による修正の書である。事実の積み重ねではなく、一方的に作られていくことへの抗議の書である。

著者は、我々は日本による朝鮮統治を可能な限り客観的に検証した本研究の結果を通して、朝鮮・朝鮮系の人々が往々にして極端に偏見に満ち、反日的歴史の記憶をあえて選択して記憶にとどめる傾向を、可能なことなら少しでも緩和するお手伝いをするべく努力してきた。

その中で我々二人にとって非常に印象的だったのは、朝鮮の近代化の為に、日本政府と朝鮮総督府が善意を持ってあらゆる努力を惜しまなかったという事実だった。だから日本の植民地政策は、汚点は確かにあったものの、同時代の他の植民地保有国との比較において、アモス氏の借りて言うなら、「九分通り公平 almost fair」だったと判断されて良いのではないかと思考する次第であるという言葉で本書を閉じている。

二人の著者は、「日本人は、朝鮮統治に関して、正しい知識を身につけて欲しい。反省すべき点は謙虚に反省すべきだが、民族史観の下で一方的に描かれた日本の過去に負い目を感じる必要はない」と日本人に訴えかけています。

とはいうものの、日本の朝鮮統治を実際に体験した人たちの世代交代で、現在では、反日情報だけが独り歩きする時代になってしまった。

朝鮮における反日感情の根源は、民族の誇りが傷つけられたことにあるという。朝鮮人は、『高度な文明社会だった祖国』が、「野蛮人とみなされていた日本人」によって侵略され、面子を潰されたと感じている。朝鮮民族は、『偉大な民族』が「儒教や仏教の手ほどきをしてやった民族に侵略された」という事実をどうしても受け入れることが出来ないから、何時までも日本人を憎むというわけである。

上の『』の部分はその当時の世界情勢を見ても、「そうかな？」と疑問に思うが、憲法まで押し付けられたわけだから理解は出来る。それはともかく、韓国人は、それほどプライドを持っていたというわけである。

ひるがえって、日本はどうだろう？ 大東亜戦争で完膚なきまでにやられて以来、アメリカ人が作った憲法を押し付けられ、国はアメリカに守ってもらい、経済だけに取り組むということがもう 60 年以上も続いている。以来、過度の自己卑下と劣等意識が形作られ、

政治・外交・学問・思想・言論などの面にその傾向が顕著に表れている。

本書を読み進めるうちに、国民性の違いはあるとはいうものの、韓国に比して日本のプライドの低さはどうだろうと考え込んでしまった。

ここに BBC 放送が世界 28 か国、約 3 万人を対象に定期的に行っている調査の 2012 年度版がある。そこには、各国の自己評価と世界評価の結果が示されている。

韓国はどうかというと、自国評価 64%に対して、世界評価は 35%である。それに対して、日本は自国評価 45%に対し、世界評価は 52%である。この序に中国も見ておこう。中国の自国評価は 77%、世界評価は 40%である。

日本以外のすべての国は、自国評価の方が世界評価より高く、唯一日本だけが、自国評価が低くなっている。

普通の国は「自国評価 > 世界評価」だが、「自国評価 >> 世界評価」の国は、うぬぼれている国、すなわち「自国が思っているほど、世界の中では評価されていない国」ということである。日本は、自国評価と世界評価とがともに高まり、同レベルになって欲しいところである。

本書は、日本の朝鮮統治の実態をより深く、より公平に理解したいと願っている日本人の座右の書になるはずである。本書によって、過去の正しい歴史を理解することは出来るが、しかし、歴史の事実とは何かを考えると、事実の一つなのに、語る人や国の立場によって解釈は人の数、国の数だけ有るのも事実である。さらに、「そもそも、植民地政策が間違っていた」という現代のものの考え方で過去を断罪するというのも問題である。

韓国の人達は拒否反応を示すだろうが、本書を朴槿恵大統領にもぜひ読んで欲しいと思うと同時に、日本国内の民族主義史観の学者諸氏にも本書を読んで積極的に反論してもらい、建設的な論争が展開されることを望む。

また、安倍総理は「歴史の修正」を求めているようであるが、現在の歴史は「アメリカ絶対善」、「日本絶対悪」である。「歴史の修正」とはこれを「日本善」、「アメリカ悪」にすることであり、これをやってしまうと、自国の歴史を否定できないアメリカは、中国と一体化し、日本を叩き潰しかねない。真実の歴史を日本国民が知ることは大切だが、今の世界情勢の中で、わざわざアメリカを敵にまわすのは愚かである。

2013. 12. 4